

令和8年1月20日

学校関係者評価委員長様

世田谷区立用賀小学校

校長 安藤 由季子

## 令和7年度 世田谷区立用賀小学校自己評価報告書

### <自己評価報告書を作成するに当たって>

- ・学校の重点目標ごとの具体的な方策の項目に沿って、「学校の自己評価」「保護者・地域のアンケート調査」「児童のアンケート調査」「区・都・全国学力調査」「東京都統一体力テスト」等の分析から、次年度の改善点の方向性を示していきます。
- ・「とても思う」「思う」の評価を肯定的な評価として受け止め、分析や考察に活用しています。
- ・児童調査アンケートは、毎年5、6年児童を対象としています。

### 令和7年度の重点目標

学校ならではのかわりあう活動を通して、「これからの新たな時代を創造するために必要な力の育成」に努め、よりよい「自分づくり」に向けて自己を成長させる子どもの育成をめざす。そのために、子どもたちに「育てたい力」を以下のように設定する。

#### <課題を解決する力の育成>

・自らの課題を見付け、解決のための見通しをもち、必要な情報を収集したり整理分析したりして自分の考えをまとめ、表現していく「探究的な学び」を充実させる。

→令和7年度世田谷区教育委員会研究指定校（授業改善に関する研究）に指定

日常の学習活動を通して、探究的な学びを充実させていく。

#### <自己肯定感・協働する力の育成>

・「学び合う活動」「学びを振り返る活動」を充実させ、学びをもとに自分のめざす姿を思い描き（未来デザイン）、思い・願いをもとに自分らしく行動する児童を育成する。また、個性を生かし、多様な人々との協働を促す教育の充実に努める。

→活動の取組に対する「振り返り」を大事にし、自己の成長を実感させ、自分に自信をもたせる。

→他者と協働することで、共に学び、自己成長につながることを体感させていく。

#### <健康な心や体を自ら作ろうとする力の育成>

・自分の心や体の調子を知り、健康な毎日を送ることにつながる自己の取組目標を決めて、前向きに取り組む。

→自分自身が健康な心と体でないと、さまざまな活動に前向きに取り組んでいくパワーを生み出して活動していくことができないので、健康な体づくりに取り組んでいく働きかけをしていく。

## 重点目標ごとの具体的な方策

### 1 「キャリア・未来デザイン教育」の実現<自己肯定感・協働する力>

#### (1) 評価結果

<b>【保護者アンケート調査から】</b>
○教員は、課題（めあて）について、自分で考えたり、友達と考えたりする時間を授業の中でとっている。(74.5%) ○教員は、タブレットを活用するなど、分かりやすい授業をしている。(71.1%) ○教員は、黒板の書き方やワークシート（ロイロノートを含む）などを工夫している。(72.5%) ○本校は、子どもが考えることや、課題を解決することを大切にした授業を行っている。(75.9%) ○本校は、子どもが考えたことを話し合ったり、発表し合ったりする機会がある。(86.5%) ○本校の学び合いや学びを振り返る活動は、自分のよさを見付け、自分に自信をもつことに効果があると思う。(77.3%) <b>【分からない11.5%】</b> △本校は、自分の生き方や将来のことについて考える授業がある。(45.9%) <b>【分からない33.1%】</b>
<b>【児童アンケート調査から】</b>
◎先生は、課題（めあて）について、自分で考えたり、友達と考えたりする時間を授業の中でとっている。(93.8%) ◎先生は、タブレットを活用するなど、分かりやすい授業をしている。(91.3%) ○先生は、黒板の書き方やワークシート（ロイロノートを含む）などを工夫している。(89.4%) ○学び合う活動では、考えたことを発表したり友達の考えからよりよい考えにしたりしている。(76.9%) ○私は、目標をもち、その実現に向けて自分らしく行動している。(76.5%) ○私は、自分の考えたことや思いを友達や先生に伝えている。(77.9%) ○私は、めあてに向かってあきらめずにねばり強く取り組んでいる。(77.9%) ○私は、学びを振り返る活動を通して自分の成長を実感している。(72.1%) △自分の生き方や将来のことについて、考える授業がある。(64.0%)
<b>【学校の自己評価から】</b>
◎すべての教育活動において、本校独自の振り返りタイム「自問タイム」を大切に、「自分で決める」「自分と対話する」「自分の良さを見付ける」力や態度の育成に重点的に取り組み、児童が自分自身の成長を実感しながら自信につなげられるように指導している。(93%) ◎教育目標の目指す子ども像に近づいているか。「よく考え工夫する子ども」(93%) (昨年度60%) ◎教員が子どもたちと対話的に関わることを通し、子どもの変容や成長を価値付けながら自己肯定感を高め、さらなる意欲につなげている。(97%) ○「キャリア・パスポート」などをもとに自らの学習状況や活動を見通したり、振り返ったりしながら自身の成長を自己評価させている。(74%)

## (2) 考察

- ・【学校の自己評価から】の◎が付いている設問から見て取れるように、教員全体が統一して意識的に行っていることが、【児童アンケート調査から】の結果へと形になり、比較的肯定的な回答に繋がったと考えられる。
- ・【保護者アンケートの調査から】で「本校の学び合いや学びを振り返る活動は、自分のよさを見付け、自分に自信をもつことに効果があると思う。」が肯定的な回答が昨年度の70.4%から今年度は77.3%と上がり、「分からない」と回答している割合が昨年度の22.9%から今年度は11.5%と下げることができた。これは、昨年度の結果を受けての改善策として、本校独自の振り返りタイム「自問タイム」について、取組や意図について保護者に伝わるよう、ホームページや学校公開、保護者会等で授業の様子を発信したり、学校だよりで校内研究の取組や児童の成長を載せる欄で定期的に発信したりした効果だと考えられる。今後も、引き続き、保護者への積極的な情報提供を続けていく。
- ・【児童アンケートの調査から】のキャリア教育についての設問「自分の生き方や将来のことについて考える授業がある。」について、保護者(45.9%、【分からない】33.1%)、児童(64%、【分からない】12.5%)共に肯定的な回答が低かった。各教科においてキャリア教育と位置付けられた授業を行っているが、それが児童にとって結び付いていないことが課題である。保護者にも児童にも、学校の教育活動全体で自分の生き方や将来につながる内容を扱っていることが理解できるように改善していく必要がある。

## (3) 改善策

- ・学び合う活動において友達同士の交流を増やし、自分の考えを広げることと、深めることを意識して授業計画を組み立てていき、本校の研究テーマである「主体的になって学ぶ児童の育成」とつながるように引き続き、指導を重ねていく。また、児童にも考えを広げる・深めるとは具体的にどうということなのかを伝えながら、児童の実感を高めていくように指導していく。
- ・キャリア教育の実践については、各教科、学校行事、特別活動、道徳等、学校の教育活動全体で自分の生き方や将来につながる内容を扱っているものの、「キャリア教育」という文言から教職員が考える教育活動と保護者が考える教育活動にズレが生じていると考えられる。また児童にも行っていることが「キャリア教育」と理解されておらず、繋がっていない現状がある。今後も引き続き、活動のねらいを共有できる授業を工夫し、保護者会や学校だよりなどで教育活動のねらいを周知していく。昨年度から行っている第6学年の「自分発見プロジェクト」のように、教育活動に保護者や地域の方、実際に働く人が参画できるよう人的資源の活用を計画していく。また、キャリアパスポートファイルについても、引き続き、児童の振り返りに教師や保護者がコメントを記述して価値付けすることで、キャリアパスポートファイルの蓄積から、児童が自らの成長を実感できるようにする。

## 2 教育のDX（デジタルトランスフォーメーション）の推進<課題を解決する力・協働する力>

### (1) 評価結果

<b>【保護者アンケート調査から】</b>
○本校は、子どもが考えたことを話し合ったり、発表し合ったりする機会がある。(86.5%) ○本校は、子どもが考えることや課題を解決することを大切にした授業を行っている。(75.9%) ○教員は、映像やタブレットを工夫し、分かりやすい授業をしている。(71.1%) ○教員は、黒板の書き方やプリントなどを工夫している。(72.5%) ○自分の子どもは、めあてに向かってあきらめずにねばり強く取り組んでいる。(74.3%)
<b>【児童アンケート調査から】</b>
◎先生は、タブレットを活用するなど、分かりやすい授業をしている。(91.3%) ○先生は、黒板の書き方やワークシート(ロイロノートをふくむ)などを工夫している。(89.4%) ○自分で考えをもち、めあてに向かって学習に取り組んでいる。(83.1%) ○学び合う活動では、考えたことを発表したり友達の考えからよりよい考えにしたりしている。(76.9%) ○私は、めあてに向かってあきらめずにねばり強く取り組んでいる。(77.9%)
<b>【学校の自己評価から】</b>
◎ICTの積極的な活用により、児童の情報活用能力の向上を図るとともに、「探究的な学び」「個別最適な学び」「協働的な学び」を実現し、学習効果を高めている。(94%) ◎教育データやデジタル技術の活用を図り、様々な校務を効率化し、情報共有を充実させることで、校務負担の削減とともに学習や指導の効果を高めている。(90%)

### (2) 考察

- ・【児童アンケート調査から】の「先生は、タブレットを活用するなど、分かりやすい授業をしている」の項目において、肯定的回答をした児童が91.3%と高かった。また、「先生は、黒板の書き方やワークシート(ロイロノートをふくむ)などを工夫している」の項目でも89.4%と昨年度よりも少し向上した。教員の活用スキルが向上しただけでなく、これまで蓄積してきたタブレットを活用したワークシートをブラッシュアップしたことにより、児童一人ひとりに応じた指導に繋がったと考えられる。
- ・【保護者アンケート調査から】の「教員は、黒板の書き方やプリントなどを工夫している」に対する肯定的回答が72.5%で、前年度よりも大きく向上した。また、「分からない」と回答した保護者が25.4%から18.2%と減少した。このことから、日ごろの学習活動をホームページや学校公開などで発信し、保護者に学習の様子を伝えることができていると考えられる。一方で、児童とのアンケートとの差が広がっているので、引き続き周知をし、情報開示していく必要がある。
- ・【児童アンケート調査から】の「学び合う活動では、考えたことを発表したり友達の考えからよりよい考えにしたりしている」に対する肯定的回答が76.9%だった。「私は、めあてに向かってあきらめずにねばり強く取り組んでいる」は77.9%だった。学校の自己評価と重ねるとずれがあるため、改善の余地が見られる。

### (3) 改善策

- ・今後も OJT や ICT 支援員と連携しながら、組織的な研修を行うことで、全教員の活用スキルを一層高めていく。その中で、ICT 機器を効果的に活用した授業改善を行ったり、家庭学習に ICT 機器を用いたりして、児童一人ひとりに応じた適切な指導を行う。また、情報モラル教育を合わせて行い、正しく活用できる力の育成を目指す。そして、それらの活動をホームページや学校公開等で保護者へ学習の様子を発信していく。
- ・ICT を活用する中で、個別最適化された学習だけでなく、適切な難易度で挑戦的な課題を提供し、児童が積極的に問題解決に取り組める環境を整備していく。また、学習過程でのフィードバックを素早く行い、児童が挫折感を感じることなく、粘り強く取り組むことができるようにしていく。
- ・ICT の活用と共に、協働学習の場を増やし、他の児童と助け合いながら課題に取り組むことで、ねばり強く取り組む力の育成を目指していく。学級内にとどまらず、学年全体で協働する場も整えていけるようにする。

### 3 多様性を尊重しながら共に学び、共に育つ教育の推進<自己肯定感・協働する力>

#### (1) 評価結果

<b>【保護者アンケート調査から】</b>
○子どもは学校生活を楽しんでいる。(89.2%) ○教職員に相談できる。(78.8%) ○本校の、学び合いや学びを振り返る活動を通して自分のよさを見付け自分に自信をもつ取組は、効果があると思う。(77.3%)
<b>【児童アンケート調査から】</b>
◎私は、友達の気持ちを大切にし、話を聞いている。(90.8%) ○学校生活は楽しい。(78.9%) ○先生たちに相談できる。(78.3%) ○自分を大切にしたり、自分のよさを見つけ自信をもったりしている。(70.2%)
<b>【学校の自己評価から】</b>
◎教員が子どもたちと対話的にかかわることを通し、子どもの変容や成長を価値付けながら自己肯定感を高め、さらなる意欲をつなげている。(97%) ○教育目標の目指す子ども像に近づいているか。「他者の思いをうけとめ、協力し合う子ども」(89%) ◎すべての教育活動において人権教育を推進するとともに、区と連携した「高齢者疑似体験」「白杖体験」「手話講座」などの障がい者理解教育や、英語活動支援員やALT、地域の外国人による英語活動等の推進を通して、障がいや性、文化の違いなどに捉われず多様性を理解し、誰もが安全、安心、快適に暮らすことができるよう、お互いを理解し合い、支え合おうとする態度や力を育成している。(93%)

#### (2) 考察

- ・【児童アンケート調査から】の「友達の気持ちを大切にし、話を聞いている」の肯定的評価は90.8%と高い結果であった。学校生活の中で友達の気持ちや存在を大切にして話を聞くことで、相手を尊重することができていると考えられる。
- ・【児童アンケート調査から】の「先生たちに相談できる」、保護者の「教職員に相談できる」は、それぞれ78.3%、78.8%と80%近い評価であった。保護者の「本校の、学び合いや学びを振り返る活動を通して自分のよさを見付け自分に自信をもつ取組は、効果があると思う」についても77.3%であった。さらに児童の自己肯定感を高めていくために、教師が一人一人のよさを見取り、伝え、認めていく必要がある。

#### (3) 改善策

- ・自分づくりという目標を全教職員がより意識し、個人のよさや大切な存在であることを伝える、そうした活動を行うなどの取組を進めていく。各教科の年間指導計画や道徳科の別葉にも位置付けを明確にしていく。また、他者から認められているという肯定的な学級風土の形成を目指す。具体的には、低学年のうちから、学級の友達を認め合う活動を多く取り入れ、自己肯定感を醸成できるようにしていく。

## 4 地域社会と協働した教育の推進

### (1) 評価結果

【保護者アンケート調査から】
◎本校は、毎月の学校だよりなどで保護者に学校の重点目標の取組を伝えている。(92.3%)
◎本校は、ホームページ・メール・様々な便りなどで、保護者に情報を提供している。(91.6%)
◎学校公開や保護者会、学校行事などで、児童の様子が分かる。(90.9%)
◎私は、学校公開や保護者会などにすすんで参加している。(83.8%)
○校長をはじめ教職員は、協力して教育活動に取り組んでいる。(83.6%)
○本校が、地域運営学校として各種地域団体の協力のもとに活動していることは、子どもたちの健全育成のために効果があると思う。(82.0%)
△本校はゲストティーチャーとして地域の人材や施設を教育活動に活かしている。(68.3%)
△私は、学校だよりなどを通して、今年度の学校重点目標を理解している。(65.1%)
△私は、PTA 活動や地域主催の行事などにすすんで協力している。(40.3%)
【学校の自己評価から】
◎学校は教育活動に保護者や地域の人材や施設を活用している。(100%)
◎学校は保護者の質問等に対して丁寧に説明対応している。(96%)
◎学校は、保護者・地域の声や願いに応える教育活動を積極的に行っている。(94%)
◎地域参画型の学校運営がなされている。(94%)
○PTA と連携した活動が積極的に行われている。(86%)
○保護者会で家庭教育について話題にしたことがある。(80%)
○学校運営委員会で話し合われたことが教育活動に生かされている。(74%)
○家庭教育支援の充実に向け、情報発信を積極的に行っている。(73%)

### (2) 考察

【保護者アンケート調査から】を見て分かるとおり、保護者の方々は学校の取組には興味をもち、学校からの情報もさまざまな方法を生かして、進んで受け取っている。一方、「私は、学校だよりなどを通して、今年度の学校重点目標を理解している」が 65.1%と、学校の重点目標や取組に関しての理解度はまだまだ浅いという結果となった。

・【学校の自己評価から】の「学校は教育活動に保護者や地域の人材や施設を活用している」は 100%と、学校は、地域の人々や施設を活動に生かす取り組みを行っている。

・【学校の自己評価から】の「学校は、保護者・地域の声や願いに応える教育活動を積極的に行っている」は、94%と、学校は保護者や地域の声や願いに応える教育活動を行い、保護者にも丁寧に対応し、地域参画型の学校経営がなされている。

### (3) 改善策

・重点目標についての理解度は 65.6%であるが、昨年は 52.4%だったこともあり、情報発信を積極的に行った結果だと考えられる。ただし、まだ数値は低いため、今後も引き続きホームページ等を中心に学校での取組を伝えていく。

- ・教育活動における保護者や地域との連携は、学校と保護者の間で認識の差が見られた。今後も学校は、より多くの地域住民や保護者の教育活動への意識を高め、参加を促進できるよう取り組んでいく。具体的には、学年ごとに年間を見通して地域に関係するテーマでのゲストティーチャーを活用した学習等や地域イベントとの連携の計画を立てていく。学校運営委員会や学校支援コーディネーターの協力のもと、地域の企業や人材の情報を集め、それらを活用した体験学習などを計画し実施する。
- ・保護者は、PTA 活動や地域主催の行事への参加には、40.3%と消極的であった。学校の取組への関心は高いので、保護者が参加しやすい時間帯や方法などを工夫し、参加率をあげていく。

## 5 健やかな体づくり<非認知能力・創造する力>

### (1) 評価結果

<p>【保護者アンケート調査から】</p> <p>◎本校が体育朝会や運動遊びの交流（異学年交流）、外遊びに取り組んでいることは健やかな体づくりに効果があると思う。(100%)</p> <p>◎本校の運動会・学芸会・宿泊行事などの学校行事は、子どもにとって楽しみな活動になっている。(96.2%)</p> <p>○本校が体育朝会やなかよしタイム（異学年交流）、そと遊びに取り組んでいることは健やかな体づくりに効果があると思う。(88%)</p>
<p>【児童アンケート調査及び東京都統一体力テストの結果から】</p> <p>○健康な体をつくるために、すすんで外遊びをしたり運動をしたりしている。(81.7%)</p> <p>○「上体起こし」の数値がどの学年も全国平均値より高い記録もしくは全国平均と同程度の数値であった。</p> <p>○「50m走」の数値が全国平均値を上回っている学年が多い。</p> <p>△「ソフトボール投げ」の数値は、平均よりも下回る学年も見られた。</p>
<p>【学校の自己評価から】</p> <p>◎栄養士や養護教諭を中心とした食育や保健・健康教育を充実させ、児童の健康に関する意識を高めている。(97%)</p> <p>○教育目標の目指す子ども像に近づいているか。「健康な心と体で前向きにがんばる子ども」(83%)</p> <p>○体育朝会や異学年の運動交流を実施することにより、運動に親しむとともに、自ら進んで運動に取り組む姿勢を育てている。(87%)</p>

### (2) 考察

- ・【保護者アンケート調査から】の「本校が体育朝会や運動遊びの交流（異学年交流）、外遊びに取り組んでいることは健やかな体づくりに効果があると思う。」が100%になった。これは、昨年度の改善策として、「体育朝会をきっかけとして、より運動に興味をもって取り組めるような内容を検討する。体育朝会で体験した運動を休み時間等にも取り組めるよう用具の種類を充実させ、場の設定をし、運動に慣れ親しませる。」ことを具現化するため、今年度は「長なわ朝会」や「短なわ朝会」などに取り組んだ。これらの朝会が運動のきっかけとなり、休み時間に長なわや短なわに取り組む児童が多く見られた結果だと考えられる。
- ・【保護者アンケート調査から】の「本校が体育朝会やなかよしタイム（異学年交流）、外遊びに取り組んでいることは健やかな体づくりに効果があると思う。」の数値が88%だった。昨年度の改善策として、「異学年交流を通じて、高学年児童が中心となって体を動かす時間をとる。」とし、なかよしタイムでは、6年生が中心となり、遊びを通して運動に関わる機会を作った。その結果だと考えられる。
- ・体力テストの結果から、「上体起こし」の数値が全国平均的に高いことがわかった。学年別で見ると、5年生男子が22.06回で全国平均が19.95回となり、2.11回も多い記録となった。しかし「ボール投げ」の数値が全国平均から低いことがわかった。6年生女子が12.33mとなり、全国平均が15.76mと3.43m低い数値となった。
- ・意識調査では、「体育の授業は楽しいと思いますか。」は94.6%、「あなたにとって運動やスポーツは

大切ですか。」は94.1%となっている。この結果から本校の児童は、運動に対して、前向きに取り組んでいることがわかる。

### (3) 改善策

- ・児童の実態に合った年間指導計画の再考を行う必要がある。6年間でバランスよく運動技能を高めしていくために、年度末に体育の年間指導の実施状況を確認する。どの学年がどのようなことを実施したのか、どのような時期に取り組んだのかを確認することにより、より系統的な指導の充実を図っていく。
- ・健康な体を作るため、食育の充実を目指す。ゲストティーチャーを招き、野菜の大切さのお話を聞いたり、給食メニューのトウモロコシ、グリーンピース、さやえんどうなどの皮むきを体験したりする活動を来年度も継続し、食育に関する関心をさらに高める。

## 6 学校における働き方改革の推進

### (1) 評価結果

#### 【学校の自己評価から】

- ◎カリキュラムマネジメントによる指導の工夫や、文書作成・印刷・配布等の ICT 活用による時間削減等に取り組み、教員の質の高い学びと持続可能な学校の実現のための創造的な時間の余白を生み出している。(90%)
- ◎教育データやデジタル技術の活用を図り、様々な校務を効率化し、情報共有を充実させることで、校務負担の削減とともに学習や指導の効果を高めている。(90%)
- 校務分掌が適切に分担されている。(83%)

### (2) 考察

- ・「余白を生み出せているか」という問いに対して、昨年度は「思う」の割合が64%だったが、今年度は90%と大幅にポイントを上げることができた。昨年度改善策で挙げた校務分掌の見直しと各種会議が精査されたことによって、よい結果へと繋がったと考えられる。複数の分掌のメンバーを一本化することにより、各会議等が効率的になり、それによって会議の時間が短縮されたことがよい結果に表れたと考えられる。また教科担当制の導入により、それぞれの担当教科が絞られたことにより、教材研究や準備の時間が削減されたことも余白を生み出すことに繋がったと考えられる。
- ・「校務負担の削減」という問いに対しては、「思う」の割合が昨年度89%、今年度90%と高い水準を維持できている。
- ・「校務分掌が適切に分担されているか」という問いに対しては、「思う」の割合が令和5年度57%、昨年度71%、今年度が83%と、年々ポイントを上げることができている。教職員の仕事量の把握とヒアリングがよい結果へと繋がっている。

### (3) 改善策

- ・個の時間を確保できるよう、引き続き余白の時間を生み出す努力を行っていく。各分掌の仕事量が偏ることがないように、担当を定期的に見直すとともに、帰宅時間が遅い教職員には声を掛け、ヒアリングをして他の教職員に割り振る等、改善していく。
- ・この2年間で授業日と授業時数が減少しているため、より計画的に授業を進めていく必要がある。活動や会議がただ、慣習的なものや形式的なものになっていないか再度見直すことで、業務を刷新していく。
- ・紙の資料を削減し、タブレットで周知することで、資料の整理や印刷・配布等の時間を削減する。